

特集

茶禅一味

講演：『南方録』について	熊倉	功夫
講演：細くとも、たゆまぬ努力を	堀井	無縄
茶禅一味の会 記念茶会レポート	林	大道

昨年、教団創立60周年を記念して、茶禅一味の会が創設されました。茶道各流派の道友が手を携え、茶禅一味の現成^{げんじょう}を目指すものであります。第一回の茶会は、昨年9月に人間禅本部道場で開催されました。久松真一博士の薫陶を受けられた心茶会会長倉沢行洋先生、芳賀洞然老師の学術後継者熊倉功夫先生、奥田正造先生門下の信州法母庵友^{ほうも}の会の皆様をはじめ、茶道関係者の方々の熱心なご参加を得て、大変意義深い茶会となりました。

禅も茶道も人間形成の具体的な実践手段であります。禅の修行によって三昧力を身に付け、真実の自己をつかみ、日々の生活の中に浄土世界を打ち開きたいものであります。本茶会の講演録と報告をもって特集といたします。

講演：『南方録』について

熊倉 功夫

一 芳賀幸四郎・西山松之助両先生との出会い

ご紹介いただきました熊倉です。本当にこのような記念すべき日にお招きいただきまして、こういう話を聞いていただきますことは大変光栄なことでございます。いつもですともうちょっとリラックスできるんですが、今日は何か緊張しております。先ほどはこの道場の中を見学させていただきましたけれども、展示室では歴代の老師方のご染筆を拝見しておりました。久し振りに私の先生であります芳賀先生の字を拝見して、またまた何か緊張してまいりました。

と申しますのは、今日こうやって私がここに立たせていただいておりますのも芳賀幸四郎先生のご縁でございます。私は昭和36年に東京教育大学に入学いたしました。当時東京教育大学というところは、全部専攻別に入学を許可したものですから、1年生に入る時に日本史研究、日本史専攻ということで試験がございました。ですから1年の時から教養課程というものがなくて、日本史専攻だったんです。1学年に20人学生が入学します。4年間で80人います。先生が8人いらっしゃいまして、1年毎にその20人に2人ずつ担任が付くんです。中、高校みたいですが、とにかく担任制度でございます。

私が入りました時の私共の学年の担任が芳賀幸四郎先生と西山松之助先生でした。西山先生も実は人間禅教団と若い頃にご縁がありまして、^{たくぼく}擇木道場で随分修行されたというような話を伺っておりました。そういうお二人が先生ございました。まあ考えてみれば、日本文化



講演する熊倉功夫先生

史の大先生がお二人いらっしやる。一方は中世文化の泰斗、一方は近世文化の泰斗でございます。お二人とも伝統文化に大変詳しいというところへ入学したものですから、何となくそういう方向に私も行くようになりました

た。このお二人の先生に大変かわいがっていただきまして、ただこのお二人の先生あんまり仲が良くなかったですけど。大先生はなかなか難しい方で、コンパともなるとお二人をどういふふうにおもてなしをするかちょっと悩ましいというようなことがありました。しかし、お二人共大変私のことをかわいがって下さいました。

あんまり偉い先生の側にいるものですから、私は禅には何と言いますか敬して遠ざけたところがございます、全く無縁に過ぎてまいりました。ですから今日ここでお話させていただいても、私は禅については全く教養あるいは体験を持たない人間ですので、そこはどうぞお許しいただきたいと思います。

ただ最近、私は語録に大変興味が出てまいりまして、今月に一回大徳寺にある塔頭たっちゅうで江月禅師の語録を読む会というのがございまして、そこへ毎月行くのが楽しみでございます。禅僧という方々、特に江月和尚がそうですけども、大変な教養人、古今東西の文学・詩歌あるいは哲学の教養をすべて持っているような、そういう教養人であるということが語録を読んでおりますと本当に分かってまいりまして、文化とはこういうものだなというふうに最近思ったりして、今になってああ先生に早くいろんなことを教えていただければ良かったと思っております。

そんなわけで私はこういうところに立たせていただきますけれども、今日はお茶のことについてお話しすることにいたしまして、禅の方面からのことは皆さんの方からお教えいただけたらと思っております。

二 芳賀洞然老師著 『茶禅一味』

先ほど資料を拝見しておりますと、「茶禅一味の会設立の趣旨」というところがございます。この中に芳賀先生、^{によよ}如々庵^{とうねん}洞然老師が書かれたご本『茶禅一味』からの引用がございます。『茶禅一味』は小さなパンフレットのような本でございます。原稿用紙で80枚ぐらいの本だったと思います。これは若い頃伺ったのですが、それを一晩で書いたら芳賀先生からお聞きしました。ですから、何と言うんですかね、^{かせい}一気呵成とはまさにこういうことでしょうね。80枚書くのは流行作家でもそうは書けないで、だいたい40、50枚書くのがやっとだと思います。小説というのは^{せりふ}台詞がありますから、どんどん行数を稼げるのです。この芳賀先生の本はびっしり詰めてお書きになった本でありますので、80枚書くというのは大変なお仕事だと思うのですが、一晩で書いたとおっしゃっていました。なるほど読んでみますと、いかにもそういう一気呵成の勢いというものが感じられる素晴らしい本でございます。

芳賀幸四郎先生がよく言っておられたことでありますが、この「茶禅一味の会設立の趣旨」2ページの前半のところにご書いてありますね。【元来茶の湯は茶の湯であり、禅は禅である。両者は別のものである。】ここが大事でございまして、茶禅一味というと何か禅とお茶は一緒だというふうに考えがちではありますが、別のものであるというお立場で如々庵洞然老師が書いておられる。

ここが一つ大事なことでして、しかもそれにもかかわらず、古来茶禅一味ということがいわれ、現代でも心ある茶人の間ではそれが強

調されている。茶禅一味ということが最初に文献の上で見られますのは、今から約500年前でございます。武野紹鷗じょうおうという堺の茶人がおりました。その武野紹鷗が画家に描かせました寿像じゆうざうというか肖像画がでございます。それに大林宗套だいりんそうとうという禅僧が賛をしてくれた。その賛の中に【茶味は禅味を兼ねる】という言葉が出てくるんですね。これが茶禅一味という言葉の一番古い文献でございます。以来、茶禅一味というのをいろんな方がおっしゃってきている。中には『茶禅録』という本まで江戸時代に生まれております。

しかしそういうふうに茶禅一味といいながら、実は禅と茶というのは違うんだと、こういうことを芳賀洞然先生はおっしゃっております。どこが共通するのかと申しますと、【相あひ（すがた）や用ゆう（はたらき）は違うが、その体たい（たい）は別物ではない。両者は本体から見た場合、二にして二ならざるもの、すなわち一味であるという主張である。そしてこの茶禅一味の説は現代の茶道のあり方を反省し、正しい発展をはかる上できわめて豊かな示唆しきょを与えるものである。】こういうふうにおっしゃっていますが、もう少し先のところで先生は、要するに「三昧さんまい」という境地が実は禅と茶は共通するのだと、その根底において、その向き合うその人の境地といいますが、求めるべき境地という点で茶と禅は一致する、こういうふうに言われております。

三 『南方録』と西山先生

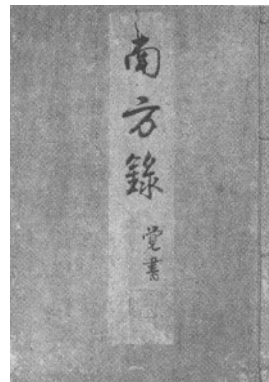
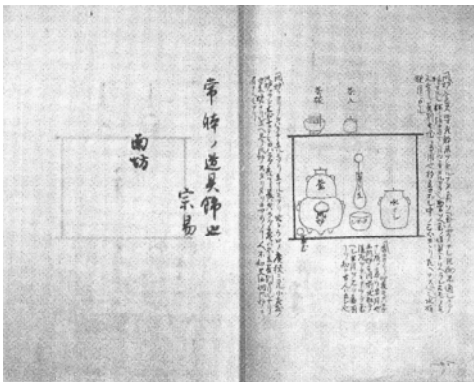
それぞれ茶と禅というのは、皆さんのこれからの取り組むべき大きな課題だと思っておりますが、そういう意味で禅、もう少し広くいえば仏教という立場で、お茶はこうあるべきだということを明快に説きましたのが『南方録』なんぽうろくという、今日お読みする本でございます。

『南方録』という本は大変不思議な本でございます。私は大学院を終わる頃に、たまたまさっき申し上げましたもう一方の恩師であります西山松之助先生、先生は今もお元気でございます。明治45年生ま

れで毎月雑誌に原稿をお書きになっておられる。車椅子のためちょっと外に出られるのは難しいんですけども、お元気であります。若い頃は大変お元気な先生で熱血漢でもあり、列車を停めたとかいろいろ武勇伝をお聞きしていますが、とにかくいつも私共が教えられたことは、こうと思ったらとにかく^{ひる}怯んではいかん、徹底的に追求しなさいいかんと、こういう火の玉みたいな先生でございました。

その西山先生が、私の大学院の終わりの頃に、岩波の日本思想大系というシリーズがございまして、その『近世芸道論』という一冊の中に『南方録』を入れるので、君手伝いたまえ、とおっしゃっていただきました。大変有り難いお仕事を頂戴^{ちょうだい}したものですから、一生懸命お手伝いいたしました。それが私の『南方録』とのご縁になります。ですから今からもう40年位前になりましょうか。

しかしその間、一生懸命勉強してきたらもう少し『南方録』の研究も深まったんでありますが、飛び飛びにやっておりました。その後雑誌に3回程連載を出しまして、ようやく今回そのまとめをとるので、ちょっとこちらへ来る前に出版社に寄りましてゲラを見てきたんでありますが、900ページという大きな本になりそうでございました。定価が15,000円だそうでございまして、ちょっと皆さんにはお買いいただけないかなと思いますが、ご要望がありましたら私に言っていた



『南方録』

ければ2割引にさせていただきます。来年の3月10日の発売だそうです（平成21年7月の発売になりました）。

四 文学としての『南方録』

『南方録』という本は読んでみますと非常に面白い、全部が全部面白いとは申しませんが、利休という人を考える、あるいは茶の湯を考える時に大変ヒント豊かな本でございます。

ただ大変評判の悪い本でございます、どういうことかといいますと、『南方録』というのは利休さんの話したこと、あるいは利休さんのやったことを克明に記録した本だと書いてあるんですけど、どう考えても嘘うそなんですね。ですからこれは全部嘘うそっぽちと見て、この本は信用できんという方もいます。しかし考えてみると、文学というのはそういうものだと思いますね。これは歴史の本だ、資料だというふうにお読みになると、嘘うそじゃないかとか何とかいろいろ疑問が出てまいりますけれども、文学として読むならばこんな素晴らしい茶の湯の文学というものはないと思います。

これは五山文学もそうだと思うんですね。例えば有名な論争があるんですが、一休和尚の詩集で『狂雲集』という詩集がございます。狂った雲の集でございます。ご本人がこういうふうに称していたという。狂っているというのは、これは反語ですね。ですから自分が狂っていると見ているお前達が狂っているんだと、私は狂っていないんだ、私は正常だと、こういう反語でもあろうかとも思います。その『狂雲集』を読むと、まあとんでもない詩がたくさんあるわけですね。お読みになった方はご存じかと思いますが、とにかく禅僧としてあり得ない、例えば遊ゆうかく郭かくに行って女性とどうこうしたとかですね、そんな話、詩がたくさんあるわけですね。

これに対して水上勉という文学者がいますが、水上さんは「だから

一休というのは偉い。そういう世俗の最も俗な、最も人間の欲望が淫^{みだ}らな姿まで突き進んだところから説いたんだ。だから一休は偉い。」
こういうふうにおっしゃって『狂雲集』を非常に高く評価しているんですね。

それに対して柳田聖山という禅学者がいますが、「とんでもない話だ、それは文学者としてはあるまじき議論である。じゃあ、水上さん、あなたが書いている小説は全部あなたの体験を書いているのか。そんなことはない。小説家というのは、自分で書いているものが全部自分の体験であるなんてことはあり得ないわけで、体験してないことも、何でも小説なんだから書くんだ。」と。「つまり、文学というものはフィクションの世界で、そのフィクションの世界をそのままリアルなその人の人生だと考えるのは、そもそも文学というものが理解できていない。あなたは文学者なのに、文学が分かっとらん。」こういうことを柳田先生がおっしゃって、その後どういう議論になったか知りませんが、とにかく『狂雲集』というのは、私はやっぱり柳田先生が言うのが正しいと思うんですね。別にあそこにある詩に書かれていることがすべて一休さんの実話だと考えるのはおかしいのではないかと。

だけれども、それは文学として読んだ時に、そこから我々が何を汲み取るかということはまた別問題でありまして、そういう一休の放埒^{ほうらつ}極まりないその詩の中から、我々はまた別のものを汲み取る可能性がある。

そういうことを考えてみますとこの『南方録』も同じでありまして、『南方録』が実話ではない、だからこれは意味がないのではなくて、茶の湯の文学として読みますと、これはなかなか意味を汲み取るべきものがいろいろあるんじゃないかということを、今日は皆さんと一緒に考えてみたいと思っております。

もうちょっと、なぜそういうことになるかということをお話しますと、利休さんが亡くなりましたのは1591年、1591年というのは天正19年であります、2月28日に利休は秀吉の命令で切腹して果てるわけにあります。

その1591年に亡くなった時に、それまでにその利休の側に南坊宗啓という禅僧がずっといて、利休の茶の湯を手伝ったり、あるいは利休について九州まで行ったりしております。この人は、堺の南宗寺というお寺の中に集雲庵という塔頭たっちゅうがごございますけど、その集雲庵の僧侶だった。

その南坊宗啓が、自分が利休さんから聞いたこと、あるいは利休さんがやっていることを見て、それをずっとメモいたしまして、これに間違いはないでしょうかと、利休さんに差し出した。そうすると利休さんがずっと読んで、これは自分の言ったことに間違いはないということで、奥書を書きまして南坊宗啓に返してくれた。これがだんだんと溜またっていくわけですね。だんだん溜まっていきまして5冊の本ができた。

で、6冊目を書いた。6冊目は利休さんのもっと秘伝の部分を書いた。そして利休さんに見せたら、利休がこれはちょっと書き過ぎだと、お前ここまで書いちゃいかんと、内容は間違っているわけじゃないけれどもこれは全部捨てなさいと言って墨で消した。これがその『墨引』という巻でございます。ところがこの南坊宗啓という人は、全然お師匠さんの言うこと聞かないわけなんですね。決して捨てなかったわけです。そのまま取っておいたのです。

この後、利休さんが亡くなった。じゃあまだ書くべきことがいろいろあるというので、またずっと書きまして、利休さんが亡くなった後という意味で『滅後』を書いた。これで『墨引』と『滅後』が加わり、全部で7巻の茶の湯の秘伝書が出来上がる。

だけど出来上がったところで、その南坊宗啓という人は、まあそんなことにかかずにらっているのも結局禅者としてはつまらんことだ。も

うこんなものも全部捨てて出ようと言って、どこかへ行方を晦まして消えちゃったということになっておるわけですね。

五 『南方録』の生まれた背景

それから100年経ちました。ちょうど100年目です。1690年、元禄3年でありますけれども、この時に、今度は博多の武士で立花実山という武将がおりました。立花実山という武将は、黒田家の隠居をした黒田光之という人の家老でございます。まあでも隠居の家老ですから大したことはないんですけれども、武士でございます。

ところが、この時代はどこの大名家も御家騒動時代でございました。あの有名な仙台藩の『^{もみ}樅ノ木は残った』に描かれているのもそうでありますし、至る所で御家騒動の絶えなかった時代でありまして、ちょうど黒田家も御家騒動だったんですね。それでその光之が後を譲りました綱政という大名がいるんですが、その人がこの光之が亡くなった後、その光之のかわいがっていた武士をみんな切り捨てていくんですね。そういうことで大変な事が起こりまして、その^{あお}煽りを食って立花実山は幽閉されてしまう。飯塚の近くの鯉田という、私も行って見ましたけどもどうってこともない農村であります、ここに幽閉されたんですね。

幽閉されて、立花実山という人は筆まめな人ですから、書こうと思っても筆も何ももらえない。しょうがないので楊枝を^{ようじ}歯で潰^{つぶ}まして、先をぐちゃぐちゃにして筆代わりにして、墨の代わりに自分の手を切って血を溜^ためて、その血で日記を書いたということが『^{ぼんじそう}梵字艸』という日記に書いてあるんです。けど見たら、どう見たって墨で書いたようにしか思えないので、まあこれもフィクションかもしれません。とにかくそういう方でございます。

最期はかわいそうに、^{ぼくさつ}撲殺、殴り殺されて刑死してしまったという、そういう方でございます。いやしかし考えてみると、利休さんは切腹

ですね、その弟子の山上宗二は耳と鼻を削^そがれて殺される。『南方録』を発見した立花実山は撲殺ですし、『南方録』を元に茶の湯理論を作った井伊直弼^{なおすけ}は桜田門外で殺されたわけでございますが、私の運命も……。無事に今日帰れば良いんですけど。

そういうふうな、大変不思議な運命^{たど}を辿るわけではありますが、その立花実山という人がたまたま、博多から江戸に主君の後について参府する参勤交代の途中で、ある人から茶の湯の伝書がある、非常に珍しいものがあるから見るかと言うので見せてもらった、見たこともない素晴らしい本だった。それで早速写させてもらった。

それから後になりまして、まだ2巻あるというので今度は堺に行きました。堺へ行ってその南坊宗啓の後継者、子孫のところに行ったら、2巻あった。それが『滅後』と『墨引』です。それでそれを早速そこで写させてもらった。

文庫本で1冊ありますから相当の量ですね。7巻のうち、その『墨引』と『滅後』という2巻で全体の4割ぐらいあるんですね。ですから量的にはかなりあるんですが、立花実山は堺へ行ってその本を貸してもらって2日2晩で全部写したと書いているのです。

これはおかしい、とても書けるものではない。だからまた立花実山は嘘をついているということになるんですけども、じゃ嘘かどうかやってみようじゃないかっていうのがさっきの西山先生で、先生は旅館に缶詰めになりまして、『南方録』の原本の写真版を前に置いてこっちへ原稿用紙を置きまして、用意ドンで書き始めた、写したんですね。それから『墨引』、『滅後』は2日かからずに写し終えた。だからこれは本当だとおっしゃるんですね。

そこで大事なことは1690年、つまり利休の百年忌にこの『南方録』が発見されたということが一つの大きな問題でございます。

『南方録』の中に、利休さんはこの先茶の湯は滅びるだろうと書い

てますね。【十年過ぎずして茶の本道^{すた}廃るべし。】と書いてるんですね。「自分が死んだ後10年経たないうちに、茶の本当の道は廃れてしまうだろう。しかしその時茶の湯は、反って繁盛しているに見える。」こう言うんですね。つまり茶の湯は一見したところ社会的には大変盛んになってくるけれども、本当の茶の湯はなくなってしまうのだと、こういうふうにした。それは茶の湯のその後の歴史をまさに予見してるわけですね。例えばどんどん茶道人口が増えてきて、今ぐらい増えたことはないんですね。まさに茶の湯600年の歴史の中で、茶の湯人口の最高の時代というのは現代でございます。もう少し正確に言うと、1990年ぐらいではないかと私は思うんです。バブルの弾けた^{はじ}辺りが日本の茶道人口のピークですね。その後どんどん今減ってるんです。ですから茶の湯をおやりになるんだったら、これからはだんだん肩身の狭い思いをすることになるかもしれない。あるいはだんだん寂しくなってくるかもしれません。

でもそれだけ茶の湯は盛んになったけれども、本当の茶の湯はあるのかという疑問ですね。これがまさに、林さんなどが言っておられる「茶禅一味の会」の精神だと思うんですが、まさに茶の湯が遊芸化してくるわけですね。元禄時代に向かってどんどん遊芸化していく。そういう中で、利休は将来を非常に悲観しながら、しかしそれでも、茶の湯の本当の自分の心を汲んでくれる茶人が出てきたならば、【百年の後たりといえども骸骨^{がいこつ}潤いを得、亡魂などが受け喜ばざらん。】とっているんですね。すごいことをいうんですね。要するに「100年の後であっても本当に自分の茶の湯というものを理解してくれる人がいるならば、自分の骸骨が生きかえり、自分の失われた魂が喜んで、再びこの世に現れてくる。茶道の守り神になるであろう。」と『南方録』に書いてあるんですね。ちょうど100年目に出てくるわけですから、まさにこれは『南方録』の登場を予言しているようなところがあるわけです。

茶の湯がだんだん変化していく、変わっていってしまう。それで「もう一度利休に帰れ。」「利休の原点に戻れ。」こういう動きが社会のあちらこちらで出てきた。そういう流れの中からこの『南方録』というものは生まれてきたのではないだろうか。つまり茶の湯をもう一度利休の原点に戻して考えてみなければいけない、もう一度茶の湯に真剣に向き合わなければいけない、こういうことを『南方録』はしているわけでございます。

そういうわけで『南方録』は、今日までいろんな人に読まれてまいりました。ただ比較的江戸時代には普及してないんですね。特に千家でも『南方録』は誰も読まなかったんでありますが、近代になりまして『南方録』は非常に高く評価されておるわけでありまして。

六 茶の湯の真髄はわび茶である

小座敷の茶の湯は、第一仏法を以って修行得道する事也

早速『南方録』を読みながらまいりたいと思うんですが、まず次の文章をご覧ください。『南方録』というのは私はなかなか良い文章だと思えます。ですからもし宜しければ、私とご一緒に声高らかにお読みいただいて結構かと思えますが、まず最初のところであります。

宗易ある時、集雲庵にて茶の湯物語ありしに茶の湯は台子だいすを根本とすることなれども、心の至る所は草そうの小座敷にしくことなしと、常々のたま宣いかよううは如何様の仔細しさいか候そうろうと申す。宗易の曰く、小座敷の茶の湯は、第一仏法もつを以て修行得道なりする事也。家居の結構、食事の珍味を楽しみとするは俗世の事也、家は漏らぬ程、食事は飢えぬ程にて足る事也。これ仏の教え、茶の湯の本意也。水を運び、薪をとり、湯を沸かし、茶を点たてて、仏に供え、人にも施われし、吾も飲む。花をたて香たを焚く、皆々仏祖の行いのあとを学ぶ也。なお委くわしくは我僧の明めにあるべしと宣う。

これが『南方録』巻頭の一文でございます。

この宗易はもちろん利休のことですね。利休は道号だと思います。宗易は大徳寺で頂いた法諱、^{ほうき いみな}諱でございます。ですから千家流のお茶をやられると、みな「宗教」の「宗」の字が付いておりますね。これは家元がみんな、例えば表千家は千宗左、裏千家は宗室、武者小路千家は宗守っていうふうに「宗」の字が付くんですね。ですから、それを頂いて和子さんなら宗和ですとか、恵子さんなら宗恵さんとか付けるわけです。その「宗」という字がそもそもなぜ付いているのか、これは言うまでもありませんが、大徳寺のお坊さん達の、禅僧の諱に宗の字が入っているからですね。そこから頂いている。一休宗純、古溪宗陳、^{そうほう}沢庵宗彭、春屋宗園、みんな「宗」という字が入っている。ということは何かと言いますと、宗易というふうに名乗って、あるいは皆さんが自分の名前を本名で言わなくて宗何とかと言っている時は、居士でありますけど、俗人にはありますけれども、それはいわば法のお名前を頂戴しているという意味なんですね。ですから、あくまでお茶の世界というのは世俗を離れた世界だと、世俗を離れて、いわばこれは脱俗の世界であるということがあの「宗」という字に象徴されているということでございます。

お茶の世界に入りましたら、おしゃべりしてはいけない話題というのがありますね。それは神仏、天下の戦、^{しゅうと}婿 舅、隣の宝、人の善し悪し(『山上宗二記』)。これはしゃべってはいけない話ですね。お茶室でこのお茶碗はいくらしてましたなんて、そういった話はしてはいかん。家族の愚痴など言ってはいけない。ゴシップもいかん。人の財産の話もいかん。宗教だとか政治の話もいかん。何をしたら良いか。^{すき}数寄の雑談をせよ、茶の湯の話をしなさい、こういうふうに言うんであります。あくまで居士号を称している限り、これは脱俗の世界にいるということの意味しているわけですね。ですから宗易の本名はたぶ

ん和四郎といったんだと思います、千和四郎。だけど茶の湯の世界では宗易というふうに言っている。

彼らはみんな十徳じゅうとくという墨染めの上っ張りと言いますが、羽織のようなものを着ております。十徳を着てる限り脱俗の世界だということ、いわば僧侶に準じる立場であるということ、あの黒い十徳という着物が象徴しているわけですね。あれが茶人の正装なんです。羽織はかま・袴はかまじゃないんですね、十徳を着ているということが正装でございます。

表千家の7代目に如心斎じょしんさいという人がいますが、如心斎は遺言を書いておまして、それはまあ行き届いた遺言でしてね。あんな遺言を延々と書く人がいるのかと思いますが、普通遺言は1枚の紙に書きますけれど、2枚書いた上に、ノートにずっと遺言が書いてあるんですね。まず第一に、お墓をどこに建てるか、どちらの向きに建てるか、それからお棺には何を入れるか、余計なものは一切入れちゃいかんとかです。昔は六道ろくどう銭と言いまして、三途さんずの川を渡る時に舟乗りふね乗りに渡さないとちゃんと向こうに渡してくれないというんでお金を持っていくことになっております。必ずその六道を渡る時の銭というのはお棺の中に入れることになってますが、如心斎はそういうことは一切してはいかん。湯灌ゆかんも必要ない。ただ新しい十徳を1枚上に載せる、こう言っていますね。そういうふうな覚悟は、やっぱり茶人らしいと思いますけれども。

そういうわけで、「宗易」はそういう利休の一つの茶の湯のあり方を示す言葉でございます。ついでに申しますと、「利休」という言葉は道号にあたるんじゃないかと思うんですけれども。後には「利休」というのは居士号であるというので、正親町おおぎまち天皇から勅賜ちよくしされたということになっております。

そして宗易がある時、あの南坊宗啓が住していた堺の南宗寺の塔頭

集雲庵で茶の湯の物語をした。どういうことを言ったかという【茶湯は台子を根本とすることなれども、心の至る所は草の小座敷にしくことなし。】

茶の湯の中に台子^{だいす}の手前というのがございます。台子というのは、高さが2尺程の小さなテーブルでございます。

本来はお茶は人前で点^たてるものではなかったのですね。人前で点てるようになるのは後のことでございます。東山時代、それこそ利休が生まれる、さらに100年ぐらい前のことですが、その時代は殿様が立派な書院で人に会うわけで、お茶を点てる同朋衆^{どうぼうしゅう}はこんな立派な部屋に出てこられません。裏に勝手がある。茶立所と言うんです。その茶立所でお茶を点てますと、同朋衆が自分で運んでいくのじゃなくて、やっぱり若いきれいな男性が運んでくる、これが潔いわけです。ですから近習といわれるような若侍が、点てられたお茶をその主君のところへ運んでいく。これが東山時代のお茶でございます。ですから茶を点てる同朋衆も、茶を点てる道具も裏に入っていて見えないんですね。

その茶立所はどうなっているかということ、棚がありまして、その棚の上にお茶を点てる道具が並んでいるわけです。中には立派な道具があるわけですね。これもお見せしたいということになりますと、その道具を座敷に置いて、將軍も大名も鑑賞するというような形になってくる。そうするとその茶立所の棚の一部を飾り棚にして、座敷に置いて道具を飾ったのが台子でございます。ですから台子は、唐物^{からもの}というような中国から舶載されてきた最高の道具が飾られるわけです。

皆さんがお茶をやられる時は、中にはそういう立派なお道具、名物をお持ちの方もいらっしゃるが、大半の方はお持ちじゃないと思いますね。お持ちじゃないとそういうものを飾るべき台子はいらんわけです、失礼ながら。ではどうしたら良いか。何にもない茶室にお客さんに入っただく。それから自分で道具を運び出してお茶を点てる。それがわび茶なんですね。ですから皆さんがやっているわび茶は、名

物道具を持たない茶でございますね。

ただ名物道具を持っている人は、お客さんが来た時に亭主が出てくる前からもう座敷に飾っとくわけです。それが台子の茶でございます。そうしますと台子の茶というのは、唐物を中心にした立派な道具で立派な茶の湯、格式高い茶の湯でございます。ですけど、それが基本なんです。茶の湯の基本だと。それを知らないと、運び出すようなわび茶ができないというふうに『南方録』は考える。

これは、今と違うんです。今お茶をやっておられる方はご存じの通り、何から始めるかというと平手前からお稽古けいこを始めるんですね。あれは草の、つまり運び出しの茶です。だんだんと稽古が進んでいきますと台子へ行きまして、台子を教えてもらうというのは相当上でございます。いくつも免状をもらわないと教えてもらえないという。

でもそれは逆だと『南方録』はしているんですね。むしろ台子という一番基本的な、型が決まっているものをまず学ぶ。それからだんだんに崩して行って、やつして行ってわび茶ができるようになる。これが『南方録』の考え方です。それをどう言っているかという真行草の真と草に当ててるんですね。

皆さんご存じの通り、お習字をやりますと真行草という。真というのは楷書ですね。楷書が一番きちとした字、それから崩して行書になる。それから一番崩したのが草書ですね。しかし我々がお習字をやる時に、草書から始めるという人はいないわけですね。やっぱり楷書から始めるわけですね。ですから楷書、真というものがまず分かっていないと崩しようがない。型がないところへ崩せと言ったら形無しになるわけですね。

型というものがあってはじめて崩すことができるということから言いますと、書院台子の茶がまずできなければいけない。それからだんだんに崩して行ってわび茶になるわけですね。ですから茶の湯は台子を根本とするんだけれども、それじゃあ型通りのお茶しかできない。

心の至る所、本当に自分の心がしみじみと心底からああ良いなと思えるようなお茶というのは何かというと草の小座敷、つまり真ではなくて草なんですね。崩しやつした姿の小さな家。小座敷というのは、四畳半以下の茶室という意味です。大体三畳台目とかですね。そういう小さな茶室のことを小座敷と言いますね。そういう小座敷で、つまり客と亭主が膝を突き合わせるような中で楽しむお茶というものが本当の心の至るお茶である、といつも利休さんは言ってるけれども、それはどういう意味ですかということを南坊宗啓が聞いたわけですね。

【宗易如何様の仔細か候と申す。】それはどういう意味ですかと聞きましたら、利休さんがそこで改めて説明してくれる。それは、【小座敷の茶の湯は第一仏法を以て修行得道する。】のである。その根本は仏教の教えであるということですね。

そしてここからが大事でありまして、今日はそれだけ憶えていただければ私も来た甲斐があるんですが、【家居の結構、食事の珍味を楽しむとするは俗世の事也、家は漏らぬ程、食事は飢えぬ程にて足る事也。】良い言葉ですね。と言いながら私もいつも何かおいしいものないかなと探しておりますがね。まあしかし本当のところ、家は漏らぬ程、食事は飢えぬ程ということで、そこに安眠高臥できる境地、これはやっぱり誰しもが望むところであろうと思いますが、なかなかそうはいきません。そうはいかないけれど理想はそうなんだということを利休さんは言ってるわけです。これは仏教の教えである、茶の湯の本意であるということですね。その後、茶の湯とはただ水を運んで薪をとって、そして火を熾し、湯を沸かして茶を点てて、そこまでは当たり前です。

この後が非常に大事だと思うんです。【仏に供え、人にも施し】ここまではみんなやります。問題は次の「吾も飲む」です。

皆さんもお茶会という一生懸命お茶を点ててもてなしますね。私

も稀まれにお茶会の亭主をやります。根津美術館でお茶を点てた、その時の僕の趣向は何かと言いますと、ちょうどその年が、益田克徳という明治時代にお茶を盛んにした大実業家がいるんですが、その人の没後百年ということで、その克徳さんが作ったお茶碗『翁さび』をご遺族にお持ち出しいただいて、その茶碗を見ていただき飲んでいただくという趣向でやったんですね。一生懸命点てて皆さんにそのお茶碗を見せて、中には何人かに飲んでもらって、全部終わって、そのお茶碗をまた持ち主が取りに来たもんですから大事にお返しして、はっと気が付いてみたら自分が飲んでないんです。これはいけない。

これに書いてある【吾も飲む。】これが大事なんですね。ついつい我々は、もてなし、人に差し上げることばかり考えて、それがもてなしだと思っているんですが、そうじゃない。やっぱり自分が飲む。自利利他という言葉がありますけれども、利他だけじゃ駄目なんですね。やっぱり自利、やっぱりその自らもそこでその恩恵に浴するといいですか、そういう恩沢に浴するところがなければ、やっぱりそれは本物ではない。人にも施し、吾も飲む。このことが意外と茶の湯では忘れられております。

お茶事の時に濃茶を練ります。練って皆さんに飲んでいただくわけですよ。だけど亭主は、どんなお茶を皆さんが飲んでいるか分かんわけですよ。「お加減はいかがですか。」「いや結構です。」あれ結構って本当に思っているか、そういうふうに答えなさいって書いてあるのか、次の人のところに行った時に「いかがですか。」「いやお茶は結構で、どこのお茶ですか。どこのお菓子ですか。」なんて問答がある。「そうですか。」って返って来てみればダメ（固まり）だけでした。みんな苦労して飲んだんだなあっていう感じがしたわけなんですけれども。そういうのは、結局自分が飲んでみなければ分からない。濃茶の回し飲みっていうのは、最後はやっぱり亭主と一緒に飲むというのが良いんじゃないかと私は思うんであります。【吾も飲む】

ここですね。

利休さんは最後に言っています、【なお委しくは我僧の明^{あきら}め】。つまり私は禅というものに無縁の人間であります、皆さんは禅をやっておられる。そうすると後は皆さんの悟りにかかっているわけでありまして、そこまでは言えないと利休さんも最後は突き放しております。そういうわけで『南方録』は仏法、禅を根底に置きながら茶の湯を見ていこうという立場で書かれているわけでございます。

七 手水鉢の水にわび茶の心がある

互いに世塵の汚れをすすぐための手水鉢也

その次のところを読んでみましょう。

宗易へ茶に参れば、必ず手水鉢ちようずの水を自身手桶ておけにて運び入れらるるほどに仔細そうらを問い候うえは、易の曰く、露地にて亭主の初の所作に水を運び、客も初の所作に手水を使う。これ露地草庵の大本也。この露地に問い問うわるる人、互いに世塵せしんの汚れをすすぐための手水鉢也。寒中にはその寒いとを厭いとわず汲み運び、暑気には清涼を催し、ともに皆奔走の一つ也。いつ入たりともしれぬ水快からず。客の目の前いかにて如何にも潔く入て良し。ただし宗及の手水鉢の如く腰掛けにつきてあらば、客来る前考えて入るべし。常の如く露地の中にあるか、玄関ひさし庇ひさしにつきてあるは腰掛けに客入りて後、亭主水を運び入るべし。それ故にこそ紹じょうおう鷗おう以来、手水鉢の水溜ためは小手桶一つの水にて、ぞろりとこぼるる程の大きさに切りたるが良きと申す也と答えられし。

皆さんもよくお使いになる手水のことでございます。手水鉢というのは結構難しいんですね。私も家の手水鉢をめったに掃除しないもの

ですから、使うとなると大変で、タワシを持って行ってゴシゴシゴシ洗うんですけども、あれはあまりきれいにならない。ですからあの苔むした手水鉢の水で口を漱ぐ^{すす}というのは、ちょっと勇気がいるわけです。だんだん皆さん近代人は、衛生観というものが非常に強くなってきておりますから。

大体神社仏閣にお参りしても手水を使う人がこの頃いなくなってきたんですね。みんな横目に見て、あの真 鍮^{しんちゆう}のあの柄杓^{ひしゃく}で口漱ぐのは嫌だなというので、行っちゃうわけですね。だけどあれは使わなきゃいかん。この頃私も心してなるべく使うようにしてるんですけども。つまりあれは自分の心身を清めるためでありますけれど、自分のためじゃないんですね。あれはあそこで心身を清めませんと我々の体にくっついてる穢れ^{けが}と一緒に境内に入っちゃうんです。そうすると境内が穢れてしまうんです。そのことを禁じているわけありますから、その手水は非常に大事な約束事です。

手水鉢の水というものは必ず亭主が自分で運んで行って、そしてまず使う。客も露地に入ったら最初にするのが手水であるということですね。

このことは、日本文化の根底に結ばれてる問題ではないかなという気がします。つまり日本人は、穢れ^{けが}ということに非常に敏感なわけですね。

西洋の例えば聖書に書かれているような原罪という意識と日本人の罪の意識は違うということをよく申します。皆さん大体あんまり罪悪感がないんですね。交通違反したって誰も悪いと思ってない。あれは運が悪かったという。選挙違反したって誰も政治家が悪いと思っていないですね。あれも運が悪かったという。ですから辞職してもまた出直してきます。選挙の洗礼を受けて清らかになりましたと、すっとう流れちゃう。これが日本人の罪の意識でございます。

ですから罪・穢れ^{けが}というものがくっついてる、何か皮膚の上にベシ

ヤツと汚いものがくっついた感じ、これが穢れですね。ですから洗えば落ちちゃうわけですね。逆に言いますと、しょっちゅう洗っている、それが禊みそぎでございまして、日本人は始終この洗うということが大好きでございまして、日本人ぐらいよく顔を洗う民族も、お風呂に入る民族もいないんじゃないかと思うんですが、洗い清めることが好きなんです。一番強力な清めはもちろん塩でございまして。ですから大相撲というのはやたらに塩まを撒いて、土俵の上は穢れがあってはいけない、こういうふうに言います。塩がなきゃどうするか。水が良い、次に非常に強力なんです。ですから水で清める。

『岸辺のアルバム』というテレビドラマがありました。八千草薫という私の大好きな女優が主人公でございまして、不倫をしているわけですね。旦那だんなは旦那でどっか行って浮気をしている。子供は子供でぐれている。見た目は美しい家族で、仲の良い家族のようであります。が、実態は全部崩壊しているというそういう家族が、これは実際にあった話でありますけれども、多摩川の土手のところに新興住宅の一軒に住んでいるわけです。ところが多摩川が史上まれ稀な増水がありまして、その新興住宅のところが抉えぐれて流れちゃったんですね。それで有名な訴訟になるんです。その話が材料になったテレビドラマでございまして。いろいろ経過がありましていよいよ大水になるんですね。大水で危険が迫る。消防士から、家から離れろって、家から追い出されまして、みんな家族が安全な所へ避難するわけですね。ところがその時お父さんが、一人制止を振り切ってその危ない家に駆け込むんです。そして家族のアルバムを持って逃げてくるんです。そのお父さんが帰って来た途端に、その家がガラッと大水で流れて消えちゃうわけです。そして一冊の家族のアルバムが残った。その夫婦が結婚した時から生まれた子供達のことはずっとアルバムにある、それを見ることによってその家族が再生するわけですね。やっぱり家族が大事だということで、ま

た家族が一つの心になって新しい出発をするという大変美しい話なんです。

だけどこれは非常に民俗学的に面白いドラマで、テーマは穢れと禊ぎなんですよ。家族を覆っていた穢れは水に流されていくわけです。これほど日本的解決はありません。何もかもきれいに流れて清められた新しい魂が残るのです。これは大事なことです。やっぱり日本の文化はそういう良さがあります。お互いつまでもこだわっていると、400年前お前達は攻めて来てどうのとかですね、100年前の戦争がどうだったとなるわけですが、良し悪しは別として日本人はもうケロッと忘れちゃうわけですね。水に流すわけです。そういうふうなことが実は日本人のDNAと言いますか、日本の文化では非常に深く続いている。つまりこれは仏教じゃないんです。仏教以前の意識なんですよ。

お葬式の時に皆さん帰って来ると塩を撒く。もう最近塩を撒く人はいなくなりましたが、清めですね。清めという感覚がだんだん失われてはいますけれども、お葬式から帰って来たら清めをする。あれはおかしいですね、仏教だったら清める必要はないわけです、成仏されたんですから。別に穢れでも何でも無い。

これは仏教以前の日本人の観念の世界が、死という問題を契機に我々の中に蘇よみがえってくるんですね。ご存じの通り『古事記』という日本の一番古い本がございます。『古事記』は仏教が入ってくる以前の日本人の精神世界を書いているわけですね。あの『古事記』の中に書いてある黄泉よみの国、つまり死者の国は汚らわしくて見るに耐えない、おぞましい世界です。決して極楽往生の世界なんてどこにも書いてない。つまり死っているものは汚れである。死と血は穢れである。これは仏教が入ってくる以前の日本人の観念で、我々の世界で生活の中にいるんなところで、ずっとまだ生きてるんですね。言ってみれば、日本人の精神世界の古層と言いますか、一番古い層なんです。これはお

そらく縄文、弥生という時代でしょうね。

その中から宗教としてその後ずっと整理されてきた形が神道であります。神道は本来の日本人の信仰とはまたちょっと違ってきますね。その一番深いところにそういう信仰がある。その上に道教が入ってくる。陰と陽で未来を見ていくという体系が陰陽五行の説、道教の世界でありますけれども、そういうふうなものが入ってくる。その上に今度仏教が入ってくる。仏教の次に、儒教が入ってくる。日本人の精神構造は重層化してきて、そして明治以後西洋思想が入ってくる。科学思想が入ってくる。戦後民主主義思想が入ってくる。

こういうふうに変ってきて、一番上の西欧文明の薄い膜のところに我々ぶよぶよといえるわけでありまして、どこか我々が心の奥底に、一番古いところに何か繫がっているんですね。そういう繫がっている部分が時々ポロツと思ひ起こされる。清めというのは、まさにそういう感覚であります。何となくそうしないと気持ちが悪い、なぜかよく分からないのですけれども、そうすることが気持ちが良い。

茶の湯をやっておりまして、時々ふっとあぁいいなと思う瞬間があります。そのいいなっていうことはうまく説明できないんですけれども、ひょっとすると日本人が後にいるんな知恵のついてくる前の、そういう一番我々がプリミティブな（原始的な）状態に持っていた感覚というものが茶の湯の中に生きていて、それに触れた瞬間ではないかと思ひます。

花を供えるということもそうだと思います。仏教とか何とかいうずっと昔、おそらく縄文の人達も花を飾ったと思うんですね。なぜ花を飾るのか。考えてみますと、花を飾るのは美しいから飾るんですけれども、美しいその背景にはやっぱり神様がいらっしゃるんですね。その花に神様が宿っているというふう思うわけですね。ですから仏壇に花を供えるということも、自分のお祖父さん・お祖母さん・お父さん・お母さん、ご先祖様に「どうぞ今日無事に一日過ごさせてください。」と

いうふうをお願いしているわけですよね。ですからあれ祖先信仰なんです。祖先が我々を守ってくれるためには、祖先が強くなきゃいけない。祖先にちゃんと我々を守ってくださるような力を持っていただくために、花の力をそこへ供えるわけですね。花は非常に力を持っているんですね。

京都に「やすらい祭」という花祭りがございます。大きな笠の上に花を立てまして、その笠の中をみんな氏子うじこは通り抜けるんですね。氏子が通り抜けるとその笠の上の花の力で我々が守られる。花の靈力って言いますかね、それをいつも我々は期待している。そうすると花を供える、花を飾ることは、どこかに花を媒介にして、我々の目に見えない自然の力を我々に頂くといい、そういう気持ちが働いているのだらうと思うんですね。

茶の湯そのものは、せいぜい600年くらいの歴史しかありませんが、その中に含まれているものは何千年も前の日本文化の深いところに繋がったものがあるからこそ、我々はお茶とかお花に非常に喜びを感じるんじゃないかとそんなふうに思います。そういうわけで、手水鉢の水というのは非常に大事なものでございます。

八 わび茶の心

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋とまやの秋の夕暮れ
花をのみ待つらん人に山里の雪間の草の春をみせばや

これはお茶の方では非常に大事にしていることでございます。ちょっと読んでみます。

紹鷗わび茶の湯の心は新古今集のうち定家朝臣あそんの歌に、見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋とまやの秋の夕暮れ、この歌の心にてこそあれと申されしと也。花紅葉すなわは即ち書院台子の結構たとに譬えたり。その花紅葉をつくづく眺め来りて見れば、無一物の境界

浦の苦屋也。花紅葉を知らぬ人の初めより苦屋には住まれぬぞ。眺め眺めてこそ、苦屋の寂さびすましたる所は見立てたれ。これ茶の本心也と言われし也。また宗易、今一首見出したりとて、常に二首を書付、信ぜられし也。同集家隆の歌に、花をのみ待つらん人に山里の雪間の草の春を見せばや、これまた相加えて得心すべし。世上の人々そこの山かしこの森の花がいついつ咲くべきかと明け暮れ外に求めて、かの花紅葉も我心にある事を知らず。ただ目に見ゆる色ばかりを楽しむ也。山里は浦の苦屋も同前の寂びた住居也。去年一年の花も紅葉もことごと悉うずく雪が埋み尽して、何もなき山里になりて、寂すましたまでは浦の苦屋同意也。さてまた彼の無一物の所より自ずから感を催すような所作が、天然と外れ外れにあるは埋み尽したる雪の春になりて陽気を迎え、雪間のところどころに如何にも青やかなる草がほつほつと二葉三葉萌え出でたる如く、力を加えずに真なる所のある道理にとられし也。歌道の心は仔細もあるべけれども、この両首は紹鷗利休茶の道にとり用いらるる心入れを聞き覚えそうろう候て記しておく事也。かように道に志深く様々の上にて得道ありし事、愚僧等が及ぶべきにあらず、まことに尊ぶべくありがたき道人、茶の道かと思へば則、祖師仏の悟道也。

武野紹鷗は、茶の湯の心を聞かれて、見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苦屋の秋の夕暮れ という歌の心であると言った。花紅葉は花が桜ですね、季節が変わって美しい紅葉。やがてその紅葉もなくなって、今はもう何にもない。見るべきものは何も一切ないような寂しい海岸で、そこには舟を引き上げて草を被せておくような程度の苦屋がぼつとあるだけで、何一つ見所のないような海岸の風景、それは侘びの姿だとかこういうふうと言ったんですね。しかし花とか紅葉を知らない人が始めから浦の苦屋がああ良いなんて思えない。やっぱり、花

があつて花も見尽くした、紅葉も見尽くした、そこで振り返ってみると、寂しい海岸の風景にこんな素晴らしいものがあるじゃないかというふうに見ることができる、それが紹鷗の境地ですね。これはちょっと厳しいですね、皆さん花紅葉を見尽くしていますかと問われるのは、私なんか名物は一つも持ってない、良い道具は一つも持ってない。貧乏な書生が浦の苦屋が良いなんて、これは何かゴマメの歯ぎしりです。

それに対して利休さんは、花をのみ待つらん人に山里の雪間の草の春を見せばや というこっちで心得なさい。私が非常に大事だと思いますのは、ここだと思います。世上の人々は、その山かしの森の花がいついつ咲くだろうとか、今日はどこが満開だとか、よく新聞に桜前線などというものが出てきて、いついつどこが咲いているなどという。そうすると、わざわざ桜前線を追いかけて旅行する人がいるんですね、明け暮れ外に求めて。しかしそうじゃないんだと、【か花紅葉も我心にある事を知らず。】ここですね。言ってみればここまで行きたいなということですね。「花紅葉は実は自分の心の中にある」ということであります。

九 自然と人間との「和解」

その仲介者としての茶の湯と禅

目に見える世界、色相と言いますか、形ある世界にとらわれてはいかんということでありましょうが、私はそれだけじゃなくて、もう一つ大事なことはこの【我心にある】ということはどういうことなのか。

皆さんのように禅をやっておられる方は、それなりの見解がおありでしょう。私は もう少し別の意味で考えてみますと、最近自然と人間との間に大きな問題が生じています。環境問題ということがやたらに盛んでありまして、エコ、エコと言うと何でも通るような、あれはエゴだという話もありますね。そういうふうには何かエコロジー、環境問題というとは何でも通ってしまうような環境、そんな環境になってき

ておりますけれども、おかしい。環境というのは、何も自分の外にあるもんじゃないということですね。

よく人間と自然との共生ということを申します。共生というのは、自然があって人間がある、それがお互いに仲良く生きていきましょうという話でありますね。それはその前提として、長いこと人間は自然と闘ってきたという西洋の歴史がございます。西洋の哲学で言えば自然をいかにコントロールするか、自然は自然のままでおいたら悪魔の巣窟そうくつになります。その悪魔の巣窟をいかに神が支配する世界に変えていくかということが、いわば西洋の科学だったわけでもありますけれども。しかし今それが行き詰っているということですね。

今環境問題を解決するには科学技術だということで、いろんな試みがなされてきました。最近あるレポートが私のところに来ました。それは冷凍野菜のレポートなんですけれども。

中国でどんどん安い野菜ができています。日本に大量に輸入されて今問題になってきていますね。何か中国というと全部悪いように思われて、あれはちょっと行過ぎでありまして、中国だって大変な努力をしています。あの餃子問題は明らかに作爲的なものだと私は思いますけれども、そういうことがあると一挙に冷凍食品はみんな悪いということになりました。でも冷凍食品なしに今我々生きていけないんですね。ですから一方で現実を見なければいけないんです。そういうことに今取り組んでいる人がたくさんいます。

その中で野菜に取り組んでいる人がいます。中国の野菜を相手にしていると、結局中国で作っているところが我々の目に見えないんですね。いかに安全に流通させていっても、最初のところが見えてないからどうしても不安が残る。それで、最初作るところから自分達の見るところでやろうじゃないかということで、日本の農家90軒と契約しまして、そこで野菜を作ってもらってそれを冷凍野菜にして出すという。

なぜ冷凍野菜かという、生産量が自然のことでですからコントロールできないんですね。でき過ぎちゃうわけですね。でき過ぎちゃうと価格がどんと下がってしまいますので、非常に農家は苦しいことになる。ですから、いつでもできた分を全部買い取って冷凍して、必要な供給量を出していくというふうに需要と供給を冷凍という技術でコントロールできるという方式を作り上げた人の話が来ておりました。そうすると、普通マーケットに出ているハウレンソウはせいぜい30センチぐらいですが、本当は50センチぐらい伸びた方がおいしいと言うんですね。そういう大きなハウレンソウを作っても市場じゃ売れないけど、冷凍にしてそれを然るべくカットして出せばちゃんと使えるということでは生産量も増える。

全部オートマチックに動いているから、人間の手が触るわけじゃないので、非常に衛生的、安全でしかも安心できる、こういうふうなことをレポートで読みましてなるほど素晴らしいと思ったんですが、それで良いんだろうかと疑問もわいてきます。

我々は徹底的にコントロールすることを以て、今自然をもう一度征服しようとしてるんじゃないかという気がするんですね。ですから、そういうのが本当の自然との共生なんだろうか？ 私はちょっと疑問に感じるのです。

そこで最近教えられたことは、共生ではなくて「和解」だということです。その言葉を教えられて、ああなるほど私は思いました。自然と人間が和解すべき時に来ている。今まで自然に対して人間は闘ってきたわけではありますが、闘いではなくて和解する。和解するためにはやっぱり「仲介者」が必要なんですね、仲介者が要る。その仲介者は誰か。私は人間の生み出した文化がその仲介をしてくれるんじゃないかと。茶の湯でありますとか、生花でありますとか、あるいは芸術が自然と人間との和解の仲介者になっていっていると。技術も仲介者

になるかもしれない。

そうすると、禅は私にはまだ理解できておりませんが、禅にはある意味で自然と人間の和解の仲介者というような立場というものもあるのかなと思うわけです。つまりここで言うところの、かしの森の花がいついつ咲くだろうかと明け暮れ外に求めて【かの花紅葉も我心にある事を知らず。】つまり自然というものは外にあるんじゃない、内なる自然とも和解しなきゃいかんということです。内なる自然との和解は、これこそ禅だと思うのです。

禅の方でよく「閑眠高臥青山に対す」という禅語を拝見します。この閑眠という境地は、^{おおびま}大閑ともいうような青山と一体となってドックと安座している気分でしょうか。人間が自分の心をコントロールし自分を自省するんじゃなくて、自分の思うように自分が好きなように行動して、それが結果として、人を幸せにし、自分が幸せになるような安閑たる境地ではないかと思えます。つまり人間の中にある仏性が^{あら}露わになる。それはまさに内なる自然との和解なんだろうと思えます。

そういうふうな外なる自然との和解、内なる自然との和解ということが哲学の方でも今一つの大きな問題になっていると思えますが、先ほどの「花紅葉我心にあることを知る」ということが多分、そういう自然と自分が一体であることに気づかせてもらうことではないでしょうか。

茶の湯をちょっと逸脱してしまいましたけれども、お茶の方でもそこへ行きたい。行けるかどうか分からんのです。10年やったからといって別に何も約束されているわけじゃない、20年やったからといって何か保証されるわけではない。これはまさに皆さんがやっておられる禅と同じことではありますが。

ただ茶の湯を徹底していけば、いつか自分はそういう境地になれる

という確信といたしますか、そういったものを持つことなのだろうと思います。茶の湯は、芳賀幸四郎先生が言われた「三昧」道なのだろうと思います。そこにこそまた茶と禅の通ずるところがあるんじゃないかと、そんなふうに思いまして、これからも私なりに努力をしていきたいと思っております。

ちょうど時間になりましたので、これで私の話を終わらせていただきます。

(平成20年9月22日、茶禅一味の会記念茶会の講演より)



懇親会で挨拶する熊倉先生(中央)

著者プロフィール

熊倉功夫

林原美術館館長、国立民族博物館名誉教授。

著書：『茶道四祖伝書』（雄山閣出版）、『茶の湯』（教育社）
『千利休』（平凡社）、『後水尾院』（朝日新聞社）『近代茶道史の研究』（日本放送出版協会）『文化としてのマナー』（岩波書店）『日本料理文化史』（人文書院）他多数。

講演：細くとも、 たゆまぬ努力を

堀井 無縄

1 はじめに

このたび、私共人間禅道場の創立60周年を記念して茶道部が設立されまして、21世紀の茶道界に茶禅一味を標榜する「茶禅一味の会」ができました。

合掌運動として茶道界各流派の人達と力を合わせ、将来この会主催の修禅会・摂心会等の開催ができるように、坐禅の修行と茶道の稽古・実習を組み合わせて、その普及を図り、茶道界発展の一步となることを念願するものであります。

私、昭和26年3月、耕雲庵老大師に入門いたしましてから、細々ながら修行を続け、馬齢を重ねて80歳になりましたが、まだまだこれから修行と頑張っております。

今回この会の設立に当たって総裁老師より会長を仰せつかりましたが、元より浅学非才、お茶の修行もこれからで、とてもその任ではないと固く辞退申し上げたところではありますが、たっのご命令であり、これからお茶の方も共に修行させていただくこととお受けいたしました次第であります。

今日は、『細くとも、たゆまぬ努力を』ということでお話をさせていただきます。

私、子供の頃母に言われていたことがありました。それは「何をやるにもしっかり頑張りなさい。今苦労して頑張ったことはすべて貯金になり、利子が付いてくるものなんだよ。努力しなかった分は借金になって後で返さないといけなくなるんだよ。」と言われました。そして嘘をつけば死んでから閻魔えんまさんに舌を抜かれるんだよと聞かされ、お盆の時などお寺によく連れていかれ、大きな地獄絵図を見せられ怖かったものでした。

2 人はどう生きてゆけばいいのか

私が禅に入門するきっかけになりましたのは、耕雲庵老大師から『人間はどう生きてゆけばいいのか?』というお話の中で、

- 嘘をついてはいけない
- 怠けてはいけない
- やりっぱなしにしてはいけない
- 我儘わがまましてはいけない
- ひとに迷惑をかけてはいけない、

という『五戒』についてご教示いただいたからでした。

そして禅の修行をするに当たっては、「一日一いちじゅうこう炷香」を実行するよう勧められましたが、老大師は「学生時代に大学の先生の奥様から、『立田さん。毎日一炷香坐りなさい。もし一日でも欠かしたら法が絶えるのだと思って、細くともいいから長く続けなさいよ。』と言われ、それを正直に実行してきた。もし私が心から今日あることを得たりということが許されるなら、全くこの奥様のお陰である。」と言われました。

また歴代の仏祖・祖師方が、この事の研鑽けんさんに命がけで骨折られたというお話も聴聞いたしました。

汾陽善昭和尚の法を嗣いだ慈明楚円禅師は、「志道に在りと暁夕怠らず、夜坐して睡らんとせば、錐を引いて自ら股に刺し」睡魔を克服し猛然と坐った。また正受老人（道鏡慧端禅師）は、自分の正念相続の程度を試さんとして、信州の山奥の山犬の徘徊する墓所で7日間も夜が明けるまで坐ったという、血のにじむようなお話に寒毛卓豎し、たゆまず努力することが人生のすべてであると奮い立ったものであります。

3 禅一筋に生きた北田香雪老

今日は、禅一筋に生き、生一本で竹を割ったような北田香雪老のお話をさせていただきます。香雪老は、平成18年11月、87歳でお亡くなりになりましたが、亡くなる20日程前に札幌支部石狩道場で、秋の撰心会がありました。香雪老は70歳を過ぎた頃より胃潰瘍や大腸癌を患って手術し、また不慮の交通事故に会い病気がちでありましたが、撰心会の結制茶礼には体調の優れない時でも必ず出席していました。

その秋の撰心会は顔が見えないので心配していましたら、風邪で寝ているとのことでした。

中日を過ぎた頃、家族からの連絡で、香雪老がどうしても参禅したいと言っている。結制茶礼に出れなかったが、参禅できるかどうか伺ってくれとのことでした。香雪老は、結制茶礼に出なかった者は参禅はできないものと、強く思っていたようでした。

次の日の11時の内参の時間に、香雪老は長女と次女のお二人に抱きかかえられて入室参禅がありました。もう一人では坐ることも立つこともできません。拝をしても手も伸びず、公案を述べるにも口が回らない状態でありました。こんな身体でよく参禅したものと驚くばかりでしたが、納得のいく参禅でした。この状態では参禅もこれが最後だろうと思い、香雪老の後ろ姿にただただ合掌いたしました。

そうしましたら次の日の内参の時間に、またお二人に抱きかかえら

れて参禅がありました。それは前日の参禅の確認にあったようですが、あの身体で二度までもと思うともう涙が込み上げてくるばかりでした。

後で聞いたことですが、かかりつけの医師は本人には風邪だと言っていたそうですが、家族には肺癌も末期でそう長くはないと言っていたようであります。

家族の方は、その身体では参禅など無理だと何度も説得したそうですが、どうしても参禅すると言って夜も寝ないので、やむを得ず連れてきたということでありました。

それから半月程経って急逝の知らせが入ったのです。

私は直ちに札幌支部長と共々、小樽張碓のご自宅へ弔問に伺いました。香雪老はまさに眠っているような穏やかな顔で床に就いていました。

長女と次女の方は異口同音に、「父は、今息を引き取る間際まで寢言のように、『参禅できてよかった、ほんとうによかった。ありがとう！ ありがとう！』と言いながら息を引き取りました。」と言われました。

そしてぼつりと一言、「父の生涯は、禅だけでした。」と言われました。

香雪老は、昭和24年の入門で、職業は国鉄のSLのベテラン機関士さんでした。小学校を出てすぐ国鉄の養成所に入り、定年までSLの機関士を勤めました。

若い頃から酒は強く、血気盛んな頃は、教団の悪い方の酒飲みの3人に数えられた名物男でした。しかし一本気で曲がったことは大嫌いな人でした。

自分は小学校しか出ていないので人の何倍も勉強しなければと、いつも漢和辞典をそばにおいて著語^{ちやくご}などを調べていました。一字一字を

調べ上げ、寝る間も惜しんで勉強し、努力した人であります。

作務においても陣頭指揮に立ち、誠の信念で生きた人で、そのひたむきな努力にいつも頭の下がったものです。

晩年は、その努力が実り大法の源底を極めるところまで境涯が進み、後輩の範となった人であります。

一つだけ香雪老のエピソードを申し上げたいと思います。と申しますのは、教団の中で耕雲庵老大師を謝らせた人は香雪老一人と思いますが、昭和25、6年のまだ物のない時代の撰心会の時でありました。

老大師の食事には典座^{てんぞ}、侍者も大変苦労した時代です。当時、香雪居士は道号もらいたてのバリバリで老大師の侍者を命ぜられていました。

ある日の夕食の時間、当日は鮮度のいい魚が手に入ったので焼き魚にしてアツアツのところを召し上がっていただこうと、食事の時間を見計らって香雪居士「食事を持ってまいりました。」その時、老大師は何か書き物をしておられたようで「オオ、そこに置いてゆけ。」と言われたそうです。そしたら血の気の多い香雪居士、今自分が一生懸命魚を焼いてアツアツのところを時間を見計らって持参したのに、そこに置いてゆけとはあんまりだと食ってかかったそうです。あまりの見幕に老大師も「これはスマン、スマン。」と謝ってすぐに召し上がったそうであります。老大師に「お主の名前は？」と聞かれ、香雪居士「ハイ、香雪です」と言ったら、老大師は「オオ、お前が香雪か。」とほほ笑まれたということでした。晩年の香雪老は、「当時は俺も青かつ



講演する堀井無繩老師

たなあー。」と述懐していました。

近年、固い決意で入門を志しても、それが薄志弱行で、少し辛いことにぶつかると、理由をつけて修行から逃げ出す者、また10年、20年と修行していても、社会の変化、生活環境の変化で経済的に団費が払えないから退団するとか、公案が難しい、著語が読めない、自分は大した学校も出ていないのでこの辺が限界だと色々理由を申し立てて修行から遠ざかってしまう者がいます。

自分の努力しないことを棚に上げて辞めようとするのでは、せっかくのご縁がもったいないことでもありますし、それでは自分に対してあまりにも不親切であり、細くとも続けたいものであります。

4 茶禅一味こそ真の茶道

「細くとも続けること」、「茶禅一味こそ真の茶道」が茶禅一味の思想であります。

如々庵洞然老師は、『茶禅一味』(人間禅叢書)の中で、茶禅一味の思想について次のように書かれております。

茶の湯は茶の湯、禅は禅であってそのすがたやはたらきは違っ
ていても、その根本においては、三昧力を養うことで相通ずる
ものである。禅の修行により三昧力を身につければ、茶道の稽古
も進み、その真味が分かるようになるという思想である。

この思想は戦国時代の末、武野紹鷗じょうおうにおいて芽生え、千利休
を経て孫の千宗旦そつたんに至って一段と深められた。しかし、元禄時代
に入り、大名や富裕の商人等の遊芸となり、茶の真精神たる「わ
び」を忘れて派手になり、この時、心ある人びとの反省が起こり
本来の在り方の「茶禅一味」が強調されることになり、この思想
が現代に至っている。

茶道で最も尊ぶものは「点茶三昧」で、茶室においてはむろんのこと茶室を離れて日常の行住坐臥のすべて、一切時、一切処における行動云為は皆これ「点茶三昧」のところで生きることが茶人の最も尊ぶところである。

禅で尊ぶものは、坐禅の時は坐禅三昧、仕事の時は仕事三昧、食事の時は食事三昧、遊ぶ時は遊び三昧と「一行三昧」で生きることが、禅の最も尊ぶところで、この三昧こそが茶と禅を結びつけ、一味ならしめる共通の基盤である。

とっておられます。

また、寂庵宗沢師の書かれた『禅茶録』には、「茶事は禅道を宗（根本の真理・教え）とする事」として、

茶は仏道の妙所に叶うべきものぞとて点茶に禅意を写し、衆生の為^{ため}に自己の心法を觀ぜしむる茶道と成れり。故に、一切茶事にして行い用うる所、禅道に異ならず。無賓主^{むひんじゅ}の茶、体用^{たいゆう}、露地、数寄^{すき}、侘^{わび}、此等^{これら}の名義を初めとして、此^この他一々 禅意^あに非ざるはなし。

と書かれています。そして最後に、

わがもん
吾門の人慎んでこの一大義を尊奉し、禅味の真茶を修行すべし。

と書かれております。

また裏千家の前家元である千玄室宗匠は、

茶禅一味は、「一碗^{わん}の茶から平和を」という和のターゲット（目標）とともに、21世紀に向かう新しい平和の哲学として認識され

出している。

私自身、昭和24年2月、後藤瑞巖^{ずいがん}老大師に入門を許され、大徳寺僧堂^{かとう}で掛塔、禅僧として修行した。瑞巖老大師が遷化された後は、伊深正^{しょうげん} 眼寺の梶浦逸外^{かじうらいつがい}老大師について修行した。老大師の厳しさの中にも人間味あふれる素晴らしい教えをいただいた。そのお陰で今日の私があると思っている。

茶道はその成立過程において禅に多くを負っています。それは単に茶道の点前^{てまえ}が禅院茶礼からきているとか所作が似ているといった表面的なもののみではないのです。

禅も茶もその求める根本が同じなのです。禅は坐禅^{ざぜん}や作務^{さむ}を通じ、茶は点前や茶事を通じてその果てにある世界が同一ということなのです。

修行の日々は辛く長いものです。しかしその次に待ちうける世界こそ、この世界そのままで光り輝くのです。精進こそ唯一の道なのです。

とされています。

5 おわりに

史上最多の国や地域が参加した世紀の祭典、北京オリンピック、パラリンピックも終わりましたが、驚くばかりの世界新記録が出て、人類の限界を超える躍動感と美しさに感動いたしました。メダルを取れた選手も取れない選手も努力が彼等の人生であり、皆輝いていました。

平泳ぎで連続二冠達成の北島選手、柔道の内柴選手、谷本、上野、石井選手、体操の内村選手等、たゆまぬ努力に花が咲きました。

ママさん柔道の谷亮子選手は、惜しくもパワー不足の判定で金メダルは取れませんでした。夫の巨人軍の谷選手は、「子育て中心の生

活の中で、人には言えない辛いことが沢山あったと思うが、よくぞ練習に打ち込んで頑張った。目標のメダルの色は違ったけれど僕には金色に輝いて見える。」と言っていました。

しかし、最近の若い人達をはじめ、努力するというのは人ごとのようで、努力もせずに成果だけを求めようとする風潮にあるようです。もちろんしっかり努力している人もおりますが、科学や技術、生活手段の進歩が人間性の向上と勘違いし、享樂することが人間の幸せとうぬぼれ、自己中心的で欲望の丸出しが権利の主張と考え、人を思いやることのない人達が増えている社会になっています。

自分は何が好きで、何をやりたいのかが分からない若者が多く、少し困難なことにぶつかると、それを乗り越える粘り強さがなく、早いうちから人生に絶望し、親が悪い、学校が悪い、社会が悪いとすべてを人のせいにして不満や怒りをぶつけてそれを抑制できず、自らの命を絶つ者、あるいは衝動的に傷害や殺人等を犯し社会から脱落してしまう者がいます。

これも日本の教育の貧困の故なのでしょうが、親や先生が子育てに際し、無理するな、我慢するな、頑張らなくていいと教え、暗記に基づいた詰め込み教育が主体では人間性が育ちません。また、教養を積むことなどは暇な人間のやることだとしているエリートといわれる政治家、経済人、学者の人達のモラル、教養の低下がこの国を迷走させていると思います。

私共が知らず知らずのうちに便利で快適な生活を求めてきたのは、近代文明のもたらしてきた結果でありましょうが、便利



茶禅一味の会記念茶会 洗心庵

性を求め、手間をかけない生活に慣れば人間は努力しなくなるものです。

禅や茶道のようにじっくり努力することや、人を思いやることを敬遠し、辛いこと、難儀なことは避けて通り、知識として知ればそれでよしとして、心を琢磨する人間形成の道を研鑽しようとする者が少なくなれば、かつての日本人の美徳や品格を失ってしまいます。歴史が示すように、刹那主義・享楽主義に流れ、骨身を惜しんで努力しない者は亡びるのであります。

世界の人々が尊敬するものは、決して経済の繁栄だけではなく、その国の自由・民主主義・人権尊重、そして国民の道德・教養の高さ・人間的魅力・その国の産んできた文化遺産ではないでしょうか。

子供の時から人と触れ合う子育て、対話型の考えさせる教育、努力しやる気を育てる教育が大事であり、じっくり実力を養っておけば良い結果は求めずして付いてくるものです。本物になるには、細くともたゆまぬ、懸命の努力が必要であります。

北海道の大雪山系の山々は既に紅葉が始まっておりますが、山野の落葉樹が厳しい霜に打たれ、黄色や紅色の錦繡を織りなすように美しくなります。

人もさまざまな苦勞、辛苦を経験し、それを耐えしのぎ、努力することによってはじめて見事な人物になれるものであります。

茶禅一味の会の誕生を願いながら、その志半ばで倒れた緝熙庵慧純老禅子の好きな句に 梅は寒苦を経て清香を発す という句があります。

梅の花が厳しい寒風に吹かれ、霜や雪にも耐えながら咲き、清らかな香りを放っている。人も幾多の艱難辛苦に耐えて精進し、しかも毅然として節操を失わず、汚濁した世界に清らかな香りを放ちたいものであると、自らの願いを込めたことでありましょう。

「細くとも継続し、たゆまぬ努力こそ人生」であり、そこから幸せが開かれるものであります。

長時間のご清聴ありがとうございました。

(平成20年9月23日、茶禅一味の会記念茶会講演会より)



茶禅一味の会記念茶会 野点席

著者プロフィール



堀井無縄（本名 / 淳彌）

昭和3年、函館市生まれ。大槻食材株式会社社長、顧問を歴任。現在、創味フーズ取締役会長。昭和26年、人間禅立田英山老師に入門。現在、人間禅師家。庵号 / 了空庵。

茶禅一味の会 記念茶会レポート

林 大道

昨年（平成20年）2月に総裁老師から、我が道場と茶道界の真の興隆を願い、「茶道部」の設立が提案され、その準備会が生まれました。

こうして、人間禅道場60周年、中央大学五葉会80周年、千葉大学禅の会50周年、早稲田大学清風会20周年、首都大学禅の会・名古屋大学光明会10周年の記念すべき時を期して、それぞれゆかりの茶道各流派の有志が集い、古来から言われ目指されてきた茶禅一味の現成げんじょうを目指す「茶禅一味の会」が誕生するところとなりました。

そして各流派からなる実行委員会を組織して、有楽流・裏千家・表千家・上田宗箇流・肥後古流・石州流の茶席8席と、ご縁の深い先生方による講演会を柱とする「茶禅一味の会」記念茶会が、千葉県市川市国府台の人間禅道場において、平成20年9月22日（月）・23日（火）の2日間にわたり行われました。

名古屋大学光明会・首都大学禅の会・早稲田大学清風会・千葉大学禅の会・中央大学五葉会は、坐禅の修行による人間形成を目的として、卒業生が今なお人間禅道場をベースにして道友の仲間と共に修行を継続して本格的禅に参じております。

また、人間禅の創立当初より、有楽流の道統を伝える耕雲庵立田英山老大師（人間禅設立者・中央大学予科教授）の立田家をはじめ、良き茶道教授方や芳賀幸四郎（如々庵芳賀洞然とうねん老師）・西山松之助（蔵

雲)・数江教一(瓢鮎子)・古田紹欽・神保博行(淡蘆)先生方という当代のきら星のごとき学者・文化人の^{けいがい}警咳に接する好縁に恵まれ、坐禅と茶道の実修に取り組んでまいりました。



会を催すにあたっては、静閑寮茶席
師や先生方への報恩感謝の誠を捧げつつ、茶道愛好家の皆様には、当
会の素志をご理解ご賛同願ひ、実施した次第であります。

私自身、かつて緝熙庵慧純老禅子と、「ぜひ茶禅一味を切り口に、
禅と茶道の真の興隆に寄与いたしましょう。」とお約束をした経緯が
あり、ここ数年来の懸案事項としておりました。そこで、このたびの
総裁老師のご提案を受け、我が意を得たりと賛同し、ぜひ禅とお茶の
道友方と協働し、老禅子のご遺志を受け継ぎ、その実現のために活動
しようと覚悟を深めた次第でありました。

次に、茶会の概要を報告します。

22日(月)午後3時から、有楽流の茶席3席が、洗心庵・洗涯庵
・留護寮において行われ、午後5時から、熊倉功夫 林原美術館館
長・国立民族学博物館名誉教授による記念講演(演題「南方録につい
て」)が聴衆150名ほどが参加して行われ、午後7時から、参集の皆
様による茶禅一味の会発足を記念した交流会が行われました。

そして翌23日(火)午前10時から、禅堂で献茶式(点前:洗珠庵
佐藤妙水、^{はんとう}半東(注1):洗松庵林楚水)が行われ、10時半から午後2
時までは、山内に次の茶席8席が設けられました。

洗心庵・裏千家薄茶席 大塚宗智席主

向日庵(前半)有楽流濃茶席 洗珠庵佐藤妙水席主【房総支部・

千葉大学禅の会】、(後半)石州流薄茶席 竜穩庵光蓮席主【四国支部】

隠寮(前半)肥後古流濃茶席 中村慈光席主【熊本支部】、(後半)上田宗箇流濃茶席 小畠光禅席主【中国支部】

留護寮和室・表千家薄茶席 古田宗絢席主【表千家五葉会】

留護寮立礼席・表千家薄茶席【坂東支部】

静閑寮(前半)有楽流薄茶席 洗翠庵片野慈水席主【中央支部】、
(後半)有楽流薄茶席 洗松庵林楚水席主【東京第一支部・首都
大学東京禅の会・早稲田大学清風会】

両忘塔野点席・有楽流薄茶席 森本守端席主【房総支部・千葉大
学禅の会】

洗涯庵・有楽流濃茶席 洗覚庵林蘭水席主【中央大学五葉会・名
古屋大学光明会・東海第一支部】

禅堂においては、点心席と我が道場の祖師方の墨跡や茶道具作品の
展覧席が設けられ、中央支部名物のかつぼ酒も振る舞われました。

講演会は、午後2時から4時まで行われ、田中清 信州法母会事務局
長のご挨拶の後、倉沢行洋 神戸大学名誉教授・茶の湯文化学会会長
が「茶の道」、また了空庵堀井無縄老師が「細くとも、たゆまぬ努力
を」という演題で講演されました。コーディネーターは林大道が務め
ました。



向日庵茶席

今回、茶禅一味という理
想を実現させるために、新
たに明確な方法論として、
奥田正造先生の実践を参考
にした茶と禅の融合による
現代版「茶禅一味メソッド
(方法・方式)」を打ち立て

て、「茶禅一味の会記念茶会」を実施いたしました。

「茶禅一味メソッド」とは、端的に言って 「掃除」、 「坐禅」、 『茶味』か『茶禅一味』の輪読、 「茶道実修」、 「参禅弁道」の五つの実践にあります。五つの実践について、簡単にご紹介いたしますと、掃除については、古来禅門においては、いわゆる作務・動禅は坐禅に勝ること万倍と言われるほど、その重要性が説かれているものであり、日常の茶の稽古前に、最低10分の実践で良いので、皆で掃除をします。

坐禅については申すまでもなく、坐して数息観を修することで、10分で結構です。

『茶味』（奥田正造著）か『茶禅一味』（芳賀洞然著）の輪読については、一章ずつで10分ほど、参加者が順番に1、2ページずつ声を出して読み上げるものです。

茶道実修については、稽古の人数にもよりますが、各流派においてそれぞれ1時間半以上実修する必要があるかと思えます。

参禅弁道については、老師を拝請し室内の事を明らめねばならず、別に時と所を選ばねばならないことを付言します。そのため「茶禅一味の会参禅会」として、2泊か3泊の実参実修の機会を設けねばなりません。

以上が「茶禅一味メソッド」であります、まさに奥田先生の実践を踏襲するものです。

ただし、「参禅弁道」を常に実践することはできないので、特に「掃除」、 「坐禅」、 『茶味』か『茶禅一味』の輪読、「茶道実修」の実践をもって、「茶禅一味メソッド」の日常に



両忘塔野点席

おける実修とするものであります。

今回は、200名もの方が参加する大茶会でしたので、「掃除」、「参禅弁道」を実施することはできませんでしたが、「坐禅」、「茶味」の輪読、「茶道実修」を各茶席にて実践いたしました。

記念茶会の成果の程はいかにというところですが、参考までに参会者3名の方から寄せられた感想を紹介させていただきます。

裏千家インターナショナル講師

「何よりも驚きましたのは、このような大規模な茶会にもかかわらず、静寂で落ち着いた雰囲気の中、お茶をいただいたことです。とてもスムーズに茶会が進行されており、ゆったりとした気持ちと、かつ凛とした雰囲気りんに包まれたお茶席でした。これも、皆様のご尽力のおかげかと存じます。」

数江瓢鮎子先生のお弟子

「今日は蕉雨苑（10年前の記念茶会）よりなお、心の充足を感じ、久々に穏やかな時間を過ごさせていただきました。一般のお茶会では絶対にない空気が流れていました。お茶を頂きながら数江先生をしきりに思い出しておりました。」

政府系財団幹部職員

「昨日はありがとうございました。妻は、最高の茶会だったと興奮しておりました。私も、楽しい2日間を過ごさせていただき、感謝しております。」

久松真一先生（元京都大学名誉教授）は、「禅の宗教改革が茶道である。」と言われましたが、私も、茶道家の方々に、「茶道の母なる禅」を、このたびの茶席・講演で感じていただければ幸いであると願うところでありました。

また、今回の記念茶会では、哲学者西田幾多郎の後継者である久松

真一先生が創始された心茶会の現会長で、茶道文化学会会長でもある倉沢行洋先生のご参加・ご講演、如々庵洞然老師・西山松之助先生の後継者である熊倉功夫先生のご参加・ご講演、また奥田正造先生を顕彰し、その道統を継承する信州法母庵友の会から事務局長の田中清先生をはじめ、30名もの会員の皆様のご参加を得たこと、そして、3人の先生方には当会の顧問をお引き受け下さり、これらの会と連携・協力が生まれたことは、茶禅一味の会の今後の活動に対して大きな財産となるものと思われま

す。茶禅一味の現成は、利休以後の400年間の茶道史において、半ばタブーのような積年の難問題であり、もちろん短期間で実現できるものではなく、複雑でデリケートな問題も孕んでいることは承知しております。しかしながら、禅の歴史を顧みたとき、まさに長い祖師禅の歴史において、20世紀に伝法を旨とする居士禅が誕生したように、21世紀の茶道界に茶禅一味の現成を目指す茶禅一味の会が誕生したことは、茶道界の真の発展のためにも不可欠な、歴史的必然ではなかったかと自負し、今後に期待をるところでもあります。

しかしながら、まだその活動は緒に就いたばかりであります。今後とも茶禅一味の会は、心茶会や法母庵友の会の方々をはじめ、志を同じくする道友の輪をさらに広げ、共に思いを合わせて茶禅一味の現成を目指して邁進する所存であります。ご指導ご支援の程よろしくお願

合掌

編集部注 (注1) 茶の湯で亭主を補佐して茶事を助ける役。

著者プロフィール



林 大道 (本名 / 憲和)

昭和32年、岐阜県生まれ。中央大学卒業、桜美林大学大学院修士課程修了。岐阜聖徳学園大学学長室勤務。現在、「茶禅一味の会」幹事長。昭和52年、人間禅白田劫石老師に入門。現在、人間禅布教師。